万葉集「蒲生野贈答歌」をめぐって

吉野和子

はじめに

万葉集は九割以上を短歌が占めている。そして残り一割のほぼ八割が長歌、二割が旋頭歌（五七七　五七七）からなる「歌」の集であるので、小説や随筆、物語などと違って使われている言葉数が極端に少ない。しかも千三百年も昔の集である。印刷のない時代から筆と墨で一文字一文字写されて今に伝わってきたものである。平仮名はまだ発明されておらず、漢字ばかりで書かれており、平安時代にはすでにどう訓むかわからなくなっていた歌も多数あり、勅命により訓みが試みられた。以来、今日までさまざまに検討され、多くの注釈書が生まれ続けている。しかし未だ訓みが定まっていない歌も数多くある。そして大多数の研究者、愛好者が認めている訓みの歌であっても、個々のことばの意味するところ、歌の意味するところ、作者の意図など、解釈は大きく、または微妙にことなっている。歌の心をより正確に受け止めるのは簡単なことではない。

あえて周辺の予備知識なしに一首のみと向き合って、ことばの清新さ、おもしろさ、リズム、引き起こす情調などを楽しむ、ことばが喚起するイメージそのものと自分との関係だけで歌を楽しむのもひとつの方法であろう。その場合には気ままに開いたそのページのその歌と題詞のみによって想像をふくらませるのである。もっとも万葉集には作者未詳の歌および意識的に作者名をはぶいて「詠」月」「七夕」「寄」露」などの項目をたてて類歌を集めた作例集のような巻もあり、作者の記されない歌が半数ちかくある。これらは必然的に歌そのもののみと向き合うしかない。

一方で、万葉集の中に複数の歌が載る作者や『日本書紀』『続日本紀』や八世紀半ば成立の漢詩集『懐風集』にその名が見える作者の歌は、それらの資料に基づき、作者の生い立ちを考慮し、また他の作品と読み比べることによって、重層的に解釈してより深く作品を理解しようとすることも可能である。いずれにしろ「歌」は文字数が極端に少ないため、一つ一つのことばの果たす役割は重く、解釈は重要である。

この稿では特に女性に人気のある額田王と大海人皇子（後の天武

天皇）が交わした以下の歌に焦点をあてて考察してみようと思う。

天皇の蒲生野に遊猟したまひし時に、額田王の作りし歌（1－20）

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

皇太子の答へし御歌（1－21）

紫のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも

一　まずは題詞と歌のみで鑑賞する

え、こんな歌を公表して大丈夫か、と思うような、秘密の恋の気配。大海人皇子（後の天武天皇・題詞では皇太子）と、額田王（古くから天智天皇の妻という説がある）の、都を離れた郊外の御料地での、薬狩という宮廷あげての行事の中でかわされた歌である。天智七年（668）旧暦の五月五日、茜や紫草など野の草が一面に生えた明るい御料地、女性たちが薬草を摘んでいる。そこへ弓を持って颯爽と馬に乗った大海人皇子が通りかかり、額田を見つけて大胆にも袖を振って特別の情を示す。標野（一般人の立ち入りを禁止した御料地）にたいして野守（禁をおかして入ってくる者を取り締まる番人）と言う。「標」は相聞歌においては占有を示すことばで、「標結ひて我が定めてし（3－394）」「我が標結ひし枝ならめやも（3－400）」など万葉集の中でよくつかわれている。野守の「守」も独占者、監視者の意味で「山守のありける知らに」「山守はけだしありとも」のように使われている。この歌の場合の野守は天智天皇をさすとする説もある。つまりこの歌は長い間「野守」（天智または天智側の人間）の目をぬすんで好意を示す天武に対して額田が秘かに歌いかけた歌として理解され、鑑賞されてきた。「そんな危ないことをして看視している人が見ていないでしょうか」と危惧することばの中に、相手への甘え、相手の気を引く媚さえ感じさせてみごとな女心の歌である。加えて「紫草野行き　標野行き」、「ムラサキの　シメの　のモリ」とたたみこむリズムのここちよさ、ことばの美しさ、「あかね」「紫」「君が袖」から喚起される色彩、印象のあざやかさ。美しい歌である。この歌が万葉集の中で群を抜いて女性に愛されているのも無理はない。筆者が初めてこの歌に接した時、ドキドキしながらもこの秘密めいた贈答歌はどのような状況でかわされ（どのようにして相手に伝えられ）、どのような経緯で『万葉集』として我々の手に残されたのだろうかということが大きな謎として心に残った。しかし、ここまでが題詞と歌のみから鑑賞し得る限度であろうか。勝手に想像しうる範囲で楽しむ。これもなかなか捨てがたい。しかし、万葉集に載る他の歌や『日本書紀』に見る人物の行跡や詠まれた年代の考察、また過去の解釈をのぞいてみるとまた異なった状況が見えてくる。

二　重層的解釈と鑑賞

上記のような、額田をはさんでの天智と天武の三角関係説はこの四年後に起こる天智天皇の皇子（大友皇子）と天武天皇の争いである「壬申の乱（672）」の争いの一因であったとする説さえ古くはなされていたことがあった。こうした解釈を助長するものとして、同じ巻一の以下の歌があげられる。しかし、はたしてこれは中大兄（天智天皇）の歌だろうか。

（以下、万葉集の歌の訓み及び訳は岩波新日本古典文学大系による）

中大兄の三山の歌一首（1－13）

香具山は　畝傍を惜しと　耳梨と　相争ひき　神代より　かくにあるらし　古も　然にあれこそ　うつせみも　妻を　争ふらしき

（香具山は畝傍山を取られるのが惜しいと、耳梨山と争いあった。神代から、このようであるらしい。昔もそうだったからこそ、今の世の人も、妻を奪いあって争うらしい。）

反歌（1－14）

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に来し印南国原

（香具山と耳梨山とが争った時、阿菩の大神が立ち上がって見に来た印南の国原よ）

①従来の説と山容

飛鳥古京の北方にあって今も飛鳥の代表的な風景をつくりだしている香具山、畝傍山、耳梨山の三山を舞台にして、というより主人公にして、香具山と耳梨山が畝傍山をとりあって争ったという伝説があったらしい。「あひし時」は「争った時」である。播磨国風土記には大和三山の闘争を知った出雲国の阿菩の大神が仲裁しようと播磨国まで来たところ、争いが終わったことを聞いて乗ってきた舟をひっくり返してその場に鎮座した、そこを神阜と名づけたとある。その場所は兵庫県揖保郡上岡里で印南野から三〇キロ離れたところだという。印南野にも同類の話が伝わって反歌となったのであろうか。引用した岩波新日本古典文学大系（以下新大系と略す）、小学館古典全集などでは「阿菩の大神が立ち上がって見に来た」としているが、歌を素直に読めば、神が仲裁に来たのではなく、印南国原が、つまり山と山の争いに原っぱが立ち上がって仲裁に来たと読むのが自然であろう。なんとも雄大な楽しい話である。

古代の人々は住んでいるまわりのもの、植物、動物、地形、気象すべてをよく見、よく観察し、よく感じている。カッコウが鶯など他の鳥に卵を育てさせる（託卵）などということもすでに知っていて歌にしている（9－1756）。そして観察した世界に想像を働かせる。同じような山が二つ並んでいれば妹山、背山、あちこちにある。大和三山はどれも標高200メートルたらずの、そこで生活している者に

とっては毎日目にする親しみやすい低い山だ。古代の人にとっては二つの山なら妹山、背山として落ち着くのだが、三つというのがどうも落ち着かない。微妙な距離感をたもち、それぞれ独特な風貌を持つ三つの山。明日香の甘樫の丘をはじめとして少し高い所にあがれば一目に見渡すことのできる三山のたたずまいは今でも勿論変わりない。静かに穏やかにたたずんでいるのを見て万葉をはるかに遡る古代人が、畝傍山を取り合って二山が争ったと想像したのも不思議はない。同じような山が二つ並んでいれば妹山背山と見るのであるから三つ並んでいる山から一つの山をめぐって二つの山が争っていると想像しただろうことは容易に想像がつく。そして自分たち、男と女の現実になぞらえて「神代からそうなのだから昔の人も今の我々もツマをとりあって争うらしい」と考える。

現在見られる通釈では新大系をはじめとして畝傍山を女性、耳梨山と香具山を男性と読み解くのが優勢のようだ。三山を天智、天武、額田の関係に重ねようとするにはそう読むしかないわけだが、三山の山容を見るとどう見ても畝傍山がどっしりとして男性的、耳梨山、香具山はやや低めでやさしい姿をしており女性的である。しかしほとんどの注釈書が畝傍山を女性としている。そして「をし」を「愛し」と解釈して「女神の畝傍山をかはゆいと思って愛し」（評釈）「畝傍山をいとしいとして」（全集）「畝傍山を愛して」（全註釈）のように解釈している。引用した新体系では「をし」を「惜し」と解釈し、「畝傍山を取られるのが惜しい」としている。すべて畝傍山を女山、香具山、耳梨山を男山とみている。まれな例として畝傍山、耳梨山を男として女性である香具山が今まで仲良かった耳梨山から心変わりして畝傍山を雄雄しいとしたため耳梨山が嫉妬して香具山と争ったとする説（新全集）もある。

「畝傍ををしと」は原文では「雲根火雄男志等」である。文字が喚起する印象からすると断然、畝傍山は男性である。万葉仮名として使われる漢字は仮名として使われているとはいえ、意味や印象をも含めて表記している例も多い。加えて山容から受ける印象を考えると、もともとは畝傍山を男性とみて女性の耳梨山と香具山が争った伝説であったと考えるのが自然であろう。

なお「うつせみもツマをあらそふらしき」のツマは原文では「嬬」が使われている。現代では「つま」は女性にのみ使われる。万葉集でも女性に使う場合が圧倒的に多い。しかし明らかに男性をさす場合にも使われており、「つれあい」の意味である。岩波古語辞典によると「結婚にあたって、本家の端（ツマ）に妻屋を立てて住むものの意」とし「結婚の相手となるもの。男女ともにいう。」としている。万葉集の中でも、天智天皇が亡くなった後の大后の御歌「・・・若草のツマ（天智をさす）の念ふ鳥立つ（2－153）」や、神亀元年(724)紀の国行幸に従駕する夫に、娘子にかわって作った歌として「・・・出で行きし愛しツマは（4－543）」など、明らかにツマが男性をさしている例がある。他に柿本人麻呂にも四例、また古事記、風土記にも例がある。なお文字で「夫君・夫」をツマと訓ませている例が三

例（笠金村・高橋虫麻呂・未詳）ある。夫を「おっと」と訓むようになるのは室町時代以降である。つまり「ツマをあらそふらしき」とあっても、妻を取り合って男二人が争ったとは限らないことになる。今見得る注釈書の中で畝傍山を男性ととる数少ない注釈書に岩波の古典文学大系があり「香具山は畝傍山を男らしく立派だと感じて耳梨山と競争した。神代からこうであるらしい。昔もこのようであったからこそ、現世でも一人の愛を二人で争うことがあるものらしい。」としている。

一人の女性をめぐって複数の男性が求婚するという設定、求婚された女性が悩んだ末、自らの命を絶つという伝説は万葉集に二箇所伝わる。その地のひとつは下総国（今の千葉県市川市）の「真間の手児名堂」、もうひとつは播磨国（現兵庫県神戸市東部の沿海または芦屋市）の「葦原の乙女塚」として今も伝えられている。万葉の時代にすでに伝説の地となっていて田辺福麻呂、高橋虫麻呂、大伴家持など複数の歌人が訪れ、伝説の男女を偲んで長歌を残している。古代のひとの琴線に触れるテーマなのであろう。いや、伝説のうまれた古代、万葉の時代、そして現代までこれは人間が生きているかぎり永遠のテーマといえるだろう。ただ複数の男性に求婚され悩んだ末、女性が死を選ぶというところは現代の女性には理解を得られないだろうか。しかしこうした伝説が残されているからといって男女の争いは女性一人に男性二人と決まったものではなく、魅力ある男性を二人の女性が取り合うことだって当然ありうることである。しかし、三山歌の場合、作者が中大兄としてあることによって山容、文字使いを無視して、女一人に男ふたりの設定とされ、額田をはさんでの天智天武の三角関係の事実の傍証としてまことしやかに語られることになったと推定される。

②題詞・左注からの考察

巻一の題詞においては、天皇、皇子、皇女の作歌は例外なく「御歌」または「御製歌」と記され、皇子や皇女には必ず名前に皇子または皇女がつけられている。そして題詞に歌の数を記しているものはない。巻二以降でも皇子の歌には必ず名前とともに「皇子」が書かれており、「御歌」または「御作歌」となっている。また巻二以降では作者未詳歌の巻をのぞいて「大津皇子贈石川郎女御歌一首」のように歌の数が記されている。三山歌の題詞は原文では「中大兄三山歌一首」となっており、作者名を「中大兄」として皇子をつけていない。また皇子の歌であるにもかかわらず、「御歌」とせず「歌」となっており、さらに、「歌一首」と歌の数が記されている。巻一として異様なばかりでなく、御歌、皇子がないのは巻二以下の題詞としても例外である。まわりとの調和も考えず、いかにも唐突に他の資料からもってこられた感があり、巻一が一旦まとめられた後に挿入された可能性を否定できない。うがった考え方をすれば、蒲生野の歌におかれた天智天皇の立場に引かれて三山の歌を何らかの資料から天智

の歌として挿入したのではないかとさえ言えるのではないか。

というのも、今我々が見ることのできる万葉集巻一はすべて歌と題詞から成り立っている。そして題詞と歌について不審をいだいたものについては、作られた時期や作者が検討されて左注としてつけられている。題詞と歌は左注よりも結びつきは強いようだが、必ずしもすべての歌において歌と題詞とが同時に記されたという保証はなく、どの時点で歌に題詞がつけられ、さらに左注が付けられたかは明らかでない。巻一（1～75）の中で、最初に一つのまとまりとして出来上がったとされる（原万葉ともいわれる）1～53までの歌は藤原京（694～710）までの歌である。左注には『日本書紀』（720）や『類聚歌林』（山上憶良著　721年以降、聖武天皇の東宮侍講時代（皇太子の教育係）に編んだものか）が引用されているので、少なくとも藤原京遷都以後、『日本書紀』成立以前に一旦出来上がった歌と題詞の集に、721年以降、左注が加えられたことは確実である。巻一の原万葉以降の54から最終歌75までにはこの類の左注がない。つまり今見る万葉集は全体としては勿論、巻一だけに限っても、一気に出来上がったものではない。なにせ巻物であるから、ハサミと糊でいかようにも編集できるのである。三山歌は巻一の核となる原万葉といわれる中の歌ではあるが、挿入された可能性は充分にある。

ところでこの長歌にはもう一首、次の歌が反歌の二首目として並んでいる。

わたつみの豊旗雲に入日さし今夜の月夜さやけかりこそ　（1－15）

（大海原にたなびく見事な旗雲に夕日が強く差して、今夜の月は明るくさやかであってほしい）

左注には「右の一首の歌は、今案ふるに、反歌に似ず。但し、旧本この歌を以って反歌に載す。」とある。たしかに長歌の三山の歌の内容と全く無関係の歌である。一説に前の印南野の歌とともに斉明天皇七年（661）六月六日に難波の浦を出発し百済救援のため九州に向かう途次、播磨国印南で仮庵の宴席で披露された国誉めの歌であるとするが、一首目の反歌は「立ちて見に来し」と大和で歌われたものとなっており、先の反歌を印南で詠んだとする説には納得がいかない。蒲生野の歌から天智天皇が額田王をとりあって天武天皇と争ったと類推し、三山歌の長歌と反歌一首を天智天皇の歌として無理やり挿入し、同じ印南野あたりで詠まれた豊旗雲の歌が印南野近辺の歌として付随してきた可能性を考慮していいのではないだろうか。

③『日本書紀』に見る天智像から

これはあくまで『日本書紀』から受ける筆者の印象であることはことわっておかねばならない。また『日本書紀』は勝ち残った天武

側の視点と論理で書かれていることは重く考慮にいれておかねばならないだろう。しかし、『日本書紀』に見る天智の行跡を追うと、三山の歌ののどかさは、そもそも天智天皇の歌であるということにも疑問をいだきたくなる。主な行跡を以下に書き出してみる。

舒明一三（641）（16）父の舒明天皇没　十六才、東宮として誄（しのびごと）をよむ（正統な後継者を強調するための記述か）

皇極　四（645）（20）六月　鎌足とともに蘇我入鹿、蝦夷をほろぼす（乙巳の変）
九月　入鹿が天皇にたてようとしていた異母兄であり自らの妻（即位後皇后となる）の父親でもあった古人大兄を出家していたにもかかわらず、謀反のかどで討たせた。

孝徳　五（649）（24）三月　乙巳の変（いわゆる大化の改新）の片腕であった大臣蘇我山田石川麻呂（妻遠智娘・造媛の父）を縊死に追い込み妻子八人も殉死した。（この前年あたりに、まだ記録に登場しない天武天皇《大海人皇子》と額田王との間に十市皇女が生まれている）

孝徳　九（653）（28）皇太子であった中大兄は、どのような事情かわからないが孝徳天皇をひとり難波宮に残し飛鳥に引き揚げる（翌年孝徳天皇はひとり難波宮で没す）

斉明　四（658）（33）孝徳天皇の皇子で中大兄のいとこにあたる有馬皇子を紀州藤白坂で絞首する。

七（661）（36）一月　不穏な朝鮮半島の動きに応じて海路征西、九州に滞在
七月　母斉明天皇九州朝倉宮で没す　天智即位せず政務を執る

（天智六）（667）（42）二月　母（斉明）妹（間人皇女・孝徳妃）長女（大田皇女・天武妃・大伯皇女大津皇子母）を埋葬（明日香　牽牛子塚古墳）
三月　飛鳥から近江へ遷都

天智　一（668）（43）一月　即位
五月　蒲生野遊猟

二（669）（44）十月　中臣鎌足没す（藤原姓を賜る）

四（671）（46）一月　大友皇子を太政大臣に任ず
一二月　没

統一を果たし、隋から唐（618～907）へ安定した大国となった中国は朝鮮半島をおびやかす。百済が滅亡し（663）高句麗が滅亡することになるが（668）天智紀には半島三国との交渉記事があふれている。天智は、その脅威におびえながらも、大国、中国にならって戸籍を

整備し（庚午年籍）、君臣和楽の詩宴さえ見習って、天皇を中心とした律令政治の基盤を着々と築いていく。そして国内的には蘇我氏を滅し、また後継者としての地位を確保するため競争者を次々に消していく。終生必死の、激しく壮絶な人生であったと思われる。その間、皇后の他に、記録に残るだけでも八人の妻をもち、十三人の子もちである。古代のおおらかさをたたえる三山の歌は「中大兄の歌」とあるから即位前の歌ということになるが、このような天智の現実の人生を考えるとどうもぴったりこない。

①から③に見るように、歌の内容のずれ、題詞の書き方の不自然さ、天智の実生活を考えると三山歌は中大兄の歌として無理やりはめ込まれた印象が強い。まして三山の歌を天智、天武、額田の三角関係の裏付けとすることはできず、蒲生野の歌を天智の目をぬすんで詠み交わした天武と額田の秘かな恋の歌であるとする傍証にはならない。しかし、この贈答歌、最新の全注釈本である、2013年初版の岩波文庫版の『万葉集』の注は「近時は、この歌が『雑歌』の部に収められて、『相聞』の部ではないことなどにより、宴の歌と考えることが多い」としながらも「かつては自分の妃、今は兄天智天皇の妃の額田王に、野守（天智）の目をぬすんで秘かに詠いかけた歌と理解されよう」としている。こうした解釈はなかなか捨てきれないようだ。

三　蒲生野の歌が宴会歌であった可能性

この贈答歌は宴会で披露された歌であると最初に指摘したのは山本健吉氏、池田弥三郎氏の『萬葉百歌』（昭和38年）である。その後、伊藤博氏が「遊宴の花」（「万葉」82号　昭和48年　その後『萬葉集の歌人と作品』に収録）で、さらに詳しく、具体的な状況を描いてみせている。そのもっとも大きな根拠としてこの歌が万葉集における恋歌、「相聞」のくくりの中になく、おおやけの場での歌、「雑歌」として載せられていることを挙げ、さらに二人の年齢のことをあげている。筆者はその他の理由として、この頃の唯一の史料である『日本書紀』において、（『日本書紀』が全面的に真実を記してはいないことを承知の上で）天智天皇の后妃、皇子の紹介に額田王の名が全く登場しないことにも注目したい。資料的に額田が天智の妃であったとする記録は全くないのである。たしかに天智天皇が亡くなった時（2－151）天智天皇を葬った時（2－155）、近江朝の詩宴で（1－16）額田は歌を作っているが、それは斉明朝（1－7～9）に引き続いて天智朝においても公の立場で、いわゆる宮廷歌人の役割を果たしていたからであると思われる。天智宮廷内での歌があるというだけで天智の妻であったとするには無理があろう。なお巻四に「額田王の、近江天皇を思ひて作りし歌」とあることも影響しているかとも思われるが、巻四の編集は近江朝からは半世紀以上後のことであり、これこそ巻一の蒲生野の歌や三山歌に影響されてつけられ

た題詞かとも思われ、妻の一人であった証拠とすることはできない。一方、天武天皇の記事には后妃とその皇子たちの紹介の後「天皇は初め鏡王の女、額田姫王を召して十市皇女を生まれた」と明記されている。天智との間で額田をとりあったとする記事もない。

さらに、この狩が行われた六六八年のふたりの年齢を考えてみる。といってもそう簡単なことではない。というのもこの時代には天皇、皇子、皇女といえども没年は記されている場合もあるが生まれた年の記載はほとんどない。天智天武でさえ生年の記載はない。天智は父の舒明天皇が亡くなった時（641）十六才とあるのをもとに一応、生年を六二六年と推定している。（年齢はすべて数え年である。十二才年長にする説もあるらしい）年齢を考える上でもう一つの頼りは八世紀半ばに成立した漢詩集『懐風藻』の略伝である。略伝によると、十市皇女（天武と額田の子）と大友皇子（天智の子）、の子である葛野王（天智・天武・額田の孫）の年齢を大宝元年（701）に三七才としている。これにより、この皇子の生まれは六六五年となる。また、母と子の生まれた年がわかっている例から、この当時の、長子を産む年齢を類推してみると、持統天皇は十八才で草壁皇子を、元明天皇は一九才で元正天皇を、光明皇后は十八才で孝謙天皇を産んでいる。少し古い時代になるが、推古天皇は十八才のとき、敏達天皇の皇后（後妻）になられたと『日本書紀』にある。

西洋でも例えば「ねむり姫」のお話で、姫が十六才になった時、各国の王子などたくさんの客を招いての盛大なパーティーを開いている。誕生パーティーの中でも十六才のパーティーは特別なのである。十六才は社交界へのデビューの年、すなわち結婚を受け入れる歳ということになる。（知っている外国の例をあげると、ペルーでは今でも満十五才の誕生日は人を招いて盛大に祝う）万葉時代の皇女たちも多くの場合、かぞえの十六・七才で結婚、十七・八才で初産がよくある例と考えていいと思う（庶民はこのかぎりにない）。十市皇女と額田王にこれを当てはめて、十八才で出産したと考えると葛野王の生まれが六六五年ということは、十市は六四八年、額田は六三一年の生まれとなる。出産年齢を最も若く想定した場合の年齢である。と、すると、蒲生野の狩が行われた六六八年には額田王は三八才、天武天皇も三八才（六八六年没　五六才説をとる）天智天皇四三才ということになる。三人にとっての孫、四才の葛野王がおり、天智には天武の皇子皇女にあたる大伯、草壁、大津、長、弓削、舎人が孫として存在している。（天武は天智の皇女四人を妻としている）このように、年齢及び孫子の状況から考えても我々？が期待するような秘めた恋を想定することはむずかしく、狩のあとの宴会での歌とする蓋然性が高いと言えよう。

蒲生野での遊猟は紆余曲折の末、ようやく遷都し、即位を果たした天智天皇の、そして近江宮廷全体の安堵感と祝賀の気分があふれたものだったにちがいない。宮廷あげての行事である。「大皇弟（大海人皇子）・諸王・内臣および群臣みなことごとくお供をした」と『日本書紀』にある。推古一九年（611）五月五日の、菟田野（うだの）における薬

狩りの記事は詳しく、「この日の諸臣の服の色はみな冠位の色と同じにした。冠にはそれぞれ飾りをつけた。」とある。蒲生野でも官位で決められた色とりどりの衣裳で臨んだにちがいない。長く都であった明日香を離れて遷都した先、近江の都は現在の大津市、琵琶湖の南西岸にある。蒲生野は近江八幡市東方から八日市市の西部にまたがるあたりで、琵琶湖の南東部に位置し、都から直線距離としても約三〇キロ、かなりの遠出であったろう。五月五日は節句であり、非日常の「晴」の日である。男は鹿狩りをし、鹿の角を薬として採取、女は野の薬草を摘む。そしてその夜は狩った鹿や猪の肉をさかなに宴会である。万葉集には宴会でうたわれた歌が数多く収められている。行事の後は宴会で締める、これは今も昔も変わらない。宴会は強壮剤となる鹿の角（鹿茸）や猪、鹿などの毛皮、肉をはじめ、貴重な薬や染料の材料となる茜や紫草など様々な恵みを与えてくださった神への感謝をささげる儀式の意味もこめられた不可欠なものであったであろう。この贈答歌は宇治（1－7）、熟田津（1－9）、遷都のとき（1－17・18）などの歌ですでに公の歌人として実績のある額田王が宴もたけなわ、誰かにうながされて狩の景物、茜、紫草、標野、野守、袖を詠み込んで歌ったものであり、この日の狩を祝福し宴を盛り上げるためのものであったとするのが妥当であろう。

同じ巻一には「天皇（天智）内大臣藤原朝臣に詔して、春山万花の艶きと、秋山千葉の彩れるとを競ひ憐ましめたまひし時に、額田王の、歌を以てこれを判めし歌（1－16）」がある。近江朝の宴では日本の宮廷において初めて本格的に漢詩を作るようになり、披露しあったようである。日本現存最古の漢詩集『懐風藻』（751年成立）にはそのことが記され、漢詩が盛んに作られたが乱離を経て（壬申の乱により）ことごとく灰燼に帰してしまったことが記されている。このように漢詩の宴においてでさえ歌によって春秋の優劣を判じてみよと命じられ、その歌が万葉集に残っているのであるから、狩の後の宴で、昼行われた狩の景物をよみこんで歌を披露せよ、と言われた可能性は充分に考えられる。つまり、この歌は宴会の歌であるばかりか大海人皇子にむかってうたった歌でさえないことになる。狩のさなか、女性たちが三々五々薬草を摘んでいるそばを馬に乗った男たちが通りかかったかもしれない。その中の誰かが誰かに向かって手をふったかもしれない。それは額田自身である必要もない。それは宮廷行事の狩の華やかな情景の一場面とも思えてくる。そして、額田の歌をきいて、突然その歌に啓発された大海人皇子が立ち上がって二首目の歌を詠じる。伊藤博氏が指摘されているようにこうした読みが正しいと考える。

なお、筆者は始めから贈答歌として扱ってきたが、実は贈答歌でさえないのである。それは題詞を注意深くみてみると、巻二の相聞における贈答歌の題詞には「天皇の鏡王女に賜ひし御歌一首」（2－91）「鏡王女の和し奉りし御歌一首」（2－92）、「大津皇子の、石川郎女に贈りし御歌一首」（2－107）「石川郎女の和し奉りし歌一首」（2－108）、「吉野宮に幸したまひし時に、弓削皇子の、額田王に贈

り与へし歌一首」（2－111）「額田王の和し奉りし歌一首」（2－112）のように、必ず誰が誰に贈った歌であるかが明記されている。これは巻四の相聞歌においても例外がない。ところが問題の歌の題詞は「天皇（天智）の蒲生野に遊猟したまひし時に、額田王の作りし歌」である。「贈った」とも「大海人皇子に」とも書いていない。これは贈った歌ではなく作った歌なのである。この題詞の書きようは、今まで指摘されていないようだが、雑歌に分類されていることに加えて客観的根拠とすることができると考える。この点、初めて「宴会の歌」であると想定された池田氏や山本氏の「おそらく宴会の乱酔に、天武が武骨な舞を舞った、その袖のふりかたを恋愛の意思表示とみたてて、才女の額田王がからかいかけた。」（池田氏）や「池田氏の言う通り、大海人の舞いぶりにからんで、『君が袖振る』といったのであろう。」（山本氏）の説は大海人を相手として歌いかけているとする点、宴会での舞を想定している点で納得できない。伊藤氏の「人妻（天智妻）を匂わせて、額田が『野守は見ずや君が袖振る』とうたったところから、即座にそのことばじりをとらえて、大海人が『人妻故に我れ恋ひめやも』と掛合式に打って返したもの、それがこの唱和だったのである。」とする説をとりたい。ただし、伊藤氏のように天智妻を匂わせたとする点には同意しがたい。また、伊藤氏は「天智の主宰している狩であるから女性はこの日、すべからく天智の一日妻なのである」としている点にも合点がいかない。

四　歌に見る天武天皇の人柄

さて、「野守は見ずや君が袖ふる」と宴会で歌いかけられて、指名もされていないのに突然、大海人皇子が自ら立ち上がって歌で返したと想定するのもあながち荒唐無稽なことではない。というのは、天武天皇はなかなかことばの感覚とユーモアのある人のようで、以下のような歌も残している。

天皇の、藤原夫人に賜ひし御歌一首（2－103）

わが里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくはのち

（我が里に大雪が降った。大原の古ぼけた里に降るのはまだまだ後のこと。）

藤原夫人の和し奉りし歌一首（2－104）

わが岡の龍（おかみ）に言ひて降らしめし雪の摧（くだ）けしそこに散りけむ

（私のいる大原の岡の、水の神に命じて降らせた雪の砕けた細片がそちらに散ったのでしょう）

飛鳥の宮廷と藤原夫人のいる大原の里はほんの四、五百メートル離れているだけだ。珍しく雪が降ってはずんだ心をこんな歌にして贈る天武天皇。藤原夫人の返歌の大胆なユーモアもなかなかなものだ。なお、藤原夫人とは藤原鎌足の娘で、天武との間に新田部皇子

を産み、天武死後に異母兄弟、藤原不比等と結婚して藤原四兄弟のひとり、藤原麻呂の母となる人である。ちなみにこの贈答歌は相聞歌に分類されている。そして題詞には贈ったことと贈る相手が明記されている。

万葉集には天武天皇の歌として他にあと三首ある。うち一首（1－26）は「或る本の歌」として載る類歌であるのでここでは省略する。残りの二首はともに壬申の乱後八年目にして初めて皇后（持統天皇）や皇子たちをつれて吉野を訪れた時の歌であると思われる。天武は壬申の乱の前年、兄である天智天皇が、天智自身の息子である大友皇子に天皇の位を継がせる意思がありながら皇位継承を勧めてきた時、身の危険を感じ、「天皇のために出家して仏道修行をします」といって逃げるように近江朝から脱出して吉野にたどりついた。一首はその時のことを回想した長歌で、降り続く雪、雨、に心中を重ねて詠んだ歌である。

天皇の御製の歌（1－25）

み吉野の　耳我の嶺に　時なくそ　雪は降りける　間なくそ
雨は降りける　その雪の　時なきがごと　その雨の　間なきが
ごとく　隅もおちず　思ひつつぞ来し　その山道を

（み吉野の耳我の嶺に、絶え間なく雪は降っていた。間断なく雨は降っていた。その雪の絶え間もないように、その雨の絶え間のないように、山道の曲がり角ごとに物思いをしながら来たのだ、あの山道を。）

旧暦の一〇月一九日、雨まじりの雪、雪まじりの雨が絶え間なく降り続く中、頭髪をおろし僧の姿となった天武が重病の天智を擁した朝廷の将来、少しずつ律令制度を整え始めた日本国の将来、近江に残してきた皇子皇女のこと、そしてこれからの自分のことなどあとからあとからとりとめもなく沸いてくる思いを繰り返し繰り返しかみしめ不安にとらわれながら大津からの長い道のりをこの吉野までやってきた当時のことを思い出し、振り返った歌である。その感無量の思いが繰り返しの語句のリズムによく表わされている。もう一首は一見ざれ歌のようである。

天皇の吉野宮に幸（みゆき）したまひし時の御製の歌（1－27）

よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見

（昔のよき人が、よい所だとよく見て、よいと言ったこの吉野をよく見よ、今のよき人よ、よく見よ）

このとき、即位後八年（679）、天武は後継者に悩んでいた。長子で壬申の乱の時おおいに活躍した高市皇子、風貌たくましく、才学があり、文筆を愛し言語明朗で天智に愛されたと『日本書紀』に書かれている大津皇子、そして皇后（後の持統天皇）が産んだ一人っ子、

多分病弱で少したよりない草壁皇子（『日本書紀』に人物評はない。また『懐風藻』にも詩は残されていない）、そして連れてきた皇子の中では最年少の忍壁皇子（他にも皇子はいたが、十五才以上が集められたと思われる）、これら、自身の四人の皇子にくわえて天智の皇子である河島皇子と志貴皇子の合計六人の若者が自分亡き後、次期天皇と天皇をささえる者としてうまくやっていってくれるだろうか。そもそも誰を後継者として選ぶべきか。

天武は十五才の時、兄（中大兄）により異母兄古大兄が討たれ、乙巳の変による蘇我氏の滅亡も経験した。また十八才の時、有馬皇子の悲運も目の当たりに見ているはずだ。そして自らは兄の子、大友皇子を滅ぼすことによって天皇の地位を得たのである。後継の天皇を決めることがいかに大きな問題であるかを実感してきている。天智から始まった、中国を手本としての政治の基盤づくりも少し一段落し、天武はすでに四九才になっていた。（天智は四二才で没している）天武にとって、後継の問題は頭の痛い問題であったにちがいない。実際、天武は吉野において同行の六皇子と皇后とに、千年の後まで継承の争いを起こさぬことをちかわせている。五月五日に吉野に行き（明日香から半日くらいで到着できる）、六日に盟約を行い、五月七日にはもう明日香にもどっている。後の、柿本人麻呂の持統天皇の行幸従駕歌に見るように、吉野の風光明媚を楽しんだ様子はなく、ひたすらこの誓いを得るための行幸であったと思われる。到着した五日の夜の宴では昔を語り（1－25）、六日、とにもかくにも皇后、皇子たちと誓いをかわすことが出来、一応はほっとしたであろう。

この、一見戯歌かことば遊びの歌とも思われる御製歌は昔のよき人（応神天皇・雄略天皇が訪れた記録がある）が「よい」と言ったこの吉野をよく見なさいと今のよき人（皇子たち）に呼びかけている。盟約を果たしたその夜の宴会の歌であろうか、縁起のいい「よし」という音を重ねて、吉野をたたえており、天武のほっとした、軽妙な心の、はずみのようなものを感じる。

天武天皇の三首の歌からその即興性、遊戯性を指摘したつもりであるがどうであろうか。「野守は見ずや君が袖振る」と問いかけた額田の歌にたいして指名もされないのに天武が即興的に立ち上がって「紫のにほへる妹をにくくあらば我恋ひめやも」と、歌で答えたと、考える傍証になるだろうか。この歌の題詞は「皇太子の答える歌」とあり、確実に前の額田の歌にたいして答えた歌である。まだ鎌足も存命中で、天智も即位したばかり、後継者は弟、大海人か息子大友かという問題も少なくとも表面的には深刻な状況にはなっていなかった。近江朝の始まったばかりの明るい気分の中で、しかも遊猟の後の宴において、天智との葛藤もなく、統治の労苦も知らない三八才の大海人皇子が、長女誕生から二一年後、今は遠い存在となった額田王の歌に応えて

紫のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも

と、答えたと想定することは充分納得がいくのである。

五　どうして「人妻ゆゑに」「恋ひ」するのか

額田の歌の「紫草野ゆき」をうけて「紫のにほへる妹」といってまず相手を賛美する。この歌の難解は「人妻ゆゑに」であろう。それは額田の「野守は見ずや」に引き出されて出てきたことばである。標野と歌ったところから野守ということばがでてきたのであって特別に見られては困る人、特定の人（夫）ではないと思う。「袖なんかお振りになって他人が見るではありませんか」というほどの意味であろう。しかし、「人妻ゆゑに」があるがゆえに、読む者に衝撃を与え、これだけ物議をかもしてきたと思われる。伊藤氏は「この『人妻故に』は、額田が『赤根さす紫野行き標野行き野守は見ずや』とうたったその『標野』『野守』の表現意図に即座に対応した『歌』の上でのことばにすぎないと見られる。」としている。つまり独身の女性なら問題ない。いや、独身の乙女でも「そんなにおおっぴらに袖を振らないでください。」というはずかしさはあるだろうが。最も袖を振っているのを見られるとまずい状況の女性といえば「人妻」ということになる。天武の当意即妙である。

さてこの「人妻ゆゑに我恋ひめやも」の解釈であるが、「美しいあなたが憎かったら」（憎いと思ったら）という上の句をうけて、「我恋ひめやも」は「何で私が恋などしようか」（大系）「恋をしましょうか」（全集）「恋いしたうはずはありません」（小川）「なんで焦がれずにおられようか」（池田）ということで大同小異、問題はないだろう。憎からず思うから恋しいのである。やっかいなのは「人妻ゆゑに」である。「人妻なのに」であれば「あなたがあまり美しいので人妻なのに恋してしまいました」となり、現代の我々には理解しやすい。しかし、「人妻故に恋をする」と「人妻なのに恋をする」では明らかに違う意味を表わす。「子どもなのに早く寝ない」「子ども故に早く寝ない」とでは子どもは早く寝るものであるという常識をふまえると、後者の文は意味をなさない。「ゆゑに」は理由をしめし「のに」は予期しない結果に対して意外に思う気持ちを表わす。

しかし、手に出来るすべての注釈書が「他人の妻であるのに」「人妻なのに」「人妻と知りながら」のように、少しずつ表現はちがうが、「なのに」と訳している。大系では補注をつけ「ユヱは元来、基づくところ、理由・原因を表わす語である。」としながら「ユヱが受ける前段の事態から当然予想される結果と相反する事態が後段に現れる場合にもちいられたユヱは、現代語では訳語としては・・・ダノニとすべきもののようである。」として、その例として以下の歌をあげている。

花細（ぐはし）し葦垣越しにただ一目相見し児ユヱ千度に嘆きつ（11－2565）
いくばくも降らぬ雨ユヱわが背子がみ名のここだく滝もとどろに（11－2840）

相思はずあるらむ児ユヱ玉の緒の長き春日を思ひ暮らさく　（10－1936）

これらを

2526　ただ一目相見た児にすぎないのにそれがもとで千度も嘆きをした

2840　たいして降りもしない雨がもとで（何度も逢ったことがないのに）わが背子についての噂のひどさは、まるで滝がごうごうと落ちるようにはなはだしく鳴りひびいてしまった

1936　自分のことを思ってくれてはいないらしい児（だから当然、自分が思いを寄せることはないはずだのに）なのに長い春の日を一日中思いつめて日の暮れに至ったことである

と解釈し、「この場合の接続は、現代語では・・・ダノニソレガモトデとも訳すべきものであろう。」としている。そして天武のこの歌を「人妻という単語だけで、当然、他の人間がそれを恋うてはならないことが示される。従って、自分がその人妻を恋するはずは無いのである。しかも、自分は恋している。そこで、『紫草のように美しい面立ちのあなたが憎いならば、あなたはすでに恋してはならない人妻ダノニ私が恋するということがあるものか』という表現になる。」と解釈している。他の注釈書でも「人妻であるのに（なのに）どうしてこんなに恋しがるでしょうか」とするのがほとんどである。「人妻は他人の妻、恋してはならないのに美しいあなたを憎からず想うので恋さずにはいられない」という解釈である。これは現代人の解釈である。

しかし「ゆゑに」を「だのに」とねじまげず、すなおにそのまま「ゆゑに」と解釈できないものであろうか。「ゆゑに」は「先行の事柄を理由として、後続の事柄が起こることを示す」接続詞である。すなおに2526「ほんの一目見ただけだからもっと見ていたい、ゆっくり逢いたいのである。恋しいのである。恋しくて千回もためいきがでてしまうのである」（2565）、「ほんの少しつきあったのがもとでこんなにもうわさが立ってしまった」（2840）、「私のことを思ってくれていないらしいあの子のせいで恋しさに物思い、今日も長い春の一日が暮れてしまう」（1936）と解釈すべきであろう。万葉の恋は近代のLOVE・恋愛とはちがうことはすでに辞書などにも記されている。古代の「恋ふ」は能動的に「異性を求める」ことではなく受動的にひたすら「異性にひかれる」ことであった。相手の不在、相手の気持ちがまだたしかめられない、なかなか逢えないなどの理由によって「恋ひしく」も思い、「恋ひし」たのだ。それゆえ、人妻に対しては他人のものであるが故、魅せられてしまったら永遠に恋いしているほかはない。「人妻ゆゑに恋ふ」のである。「紫のにおいたつように美しいあなたを憎からず思ってもあなたは人妻なので恋いこがれているしかありません」とでも訳しておこう。

おわりに

以上、蒲生野の歌が、ときめく恋の歌から人生経験豊富な熟年の男と女の宴会での歌となったがいかがなものであろうか。おまけのエピソードとしてつけくわえる。伊藤博氏はその著書の中で、昭和四二年専修大学夏期講座において講述したところ、講演終了後、「自分は『赤根さす紫野行き』の一首によって万葉のこよなき愛読者となった。それなのに、この歌について自分の持っていたイメージをこのように破戒されてしまっては、自分にとっては死を宣告されたも同様で、今後万葉を読む意欲がおこらない、だからぜひ撤回してほしい」と迫られたと記している。それほど大きなギャップではある。なお、天智天皇、天武天皇の歌およびそこから感じられる人間性にやや触れたが、この問題は万葉集、特に、核となる原万葉（一～五三）の編集者の意図ときりはなして考えることはできない。つまり編者による印象操作の可能性も考慮しなくてはならないだろう。しかしこの問題はまた別の機会にゆずるしかない。

おまけ

額田王は万葉初期を代表する歌人で、日本画家安田靫彦画伯の肖像画が有名だが、画家をはじめ多くの人を魅了してきた。十代から斉明天皇の行幸に同行し、天皇に代わって歌を詠んでいる。万葉集には一三首を残している。斉明天皇のもとで短歌三首（二首は斉明天皇の御製とする伝がある）、天智天皇のもとで長歌二首反歌一首、短歌一首さらに天智の没後、葬送に関連して長歌一首、短歌一首を詠み、他に私的な歌としては天武の皇子である弓削皇子との贈答で二首、姉かともいわれる鏡王女との応答の一首がある。いずれも才気あふれる、ことば明らかな、心の伝わる魅力的な歌である。すべてを紹介したいところだが、ここでは天智天皇のもと、明日香から近江への遷都の折、おそらく天皇に代わって明日香を離れるにあたってこの地で大きな力を持っていた地の神、大三輪の神をなだめ、鎮めるために歌ったともいわれる長歌反歌。そして中国の六朝の漢詩に学んだといわれる歌を付して、額田王の魅力にひたりながら、この稿をとじることとする。

額田王の近江国に下りし時に作りし歌（1－17）

味酒（うまさけ）　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山のまに　い隠るまで　道の隅（くま）　い積もるまでに　つばらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見放けむ山を　心なく　雲の隠さふべしや

〈〈うまさけ〉三輪の山よ、〈あをによし〉奈良の山の、山の向こうに隠れるまで、道の曲がり角が幾重にも重なるまで、十分に見続けて行きたいのに、幾たびも遠く眺めたい山なのに、つれなくも、雲が隠してよいものであろうか。〉

反歌（1－17）

三輪山を然も隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや

（三輪山をあんなにも隠すことか。せめて雲だけでも思いやりがあってほしいものだ。あんなに隠すべきだろうか）

額田王の、近江天皇を思ひて作りし歌一首（4－488）

君待つと我が恋ひおれば我がやどの簾動かし秋の風吹く

（あなたのおいでを御待ちして、恋しい思いをしていると、私の家の簾を動かして、秋の風が吹きます）

読み下し文および訳文は岩波新古典文学大系『万葉集』による

日本書紀の引用は『全現代語訳　日本書紀』宇治谷孟　講談社学術文庫による。（　）内は文中での略称。

参考文献

萬葉集全釈　鴻巣盛広　一九三〇～一九三五　再刊　一九八七　秀英書房

萬葉集全註釈（全註釈）武田祐吉　一九四八～一九五一　増訂　一九五六　角川書店

萬葉集評釈（評釈）窪田空穂　一九四三～一九五二　東京堂出版

評釈萬葉集　佐々木信綱　一九四八～一九五四

日本古典文学大系（大系）萬葉集　高木市之助他　一九五七～一九六二　岩波書店

萬葉百歌　山本健吉　池田弥三郎　一九六三　中公新書

日本古典文学全集（全集）萬葉集　小島憲之他　一九七一～一九七五　小学館

萬葉集の歌人と作品　上　伊藤博　一九七五　塙書房

新潮古典集成　萬葉集　青木生子他　一九七六～一九八四　新潮社

万葉集全注　巻一　伊藤博　稲岡耕二　一九八三　有斐閣

新編日本古典文学全集（新全集）萬葉集　小島憲之他　一九九四～小学館

新日本古典文学大系（新大系）萬葉集　佐竹昭宏他　一九九九～岩波書店

万葉集　隠された歴史のメッセージ（小川）小川靖彦　二〇一〇　角川選書

万葉集　佐竹昭宏他　二〇一三～二〇一五　岩波文庫

（本学博士後期課程満期退学）